

明日への扉

Door to Tomorrow

帚
ほうき

職

人

良質な材料にこだわる優しい掃き心地。



Kenya Kobayashi

1986年静岡県生まれ。幼いころ、民芸品や帚などをつくって売っていた祖父の仕事に興味を抱く。高校卒業後は地元企業に就職し、結婚。現在、愛川町で研鑽を積んでいる。

中津帚(なかつほうき)

明治初期に中津村(現愛川町)で誕生。かつて帚づくりは町の一大産業であった。最近、無農薬にこだわったホウキモロコシを使い、昔ながらの製法で一本一本手づくりする帚に再び関心が寄せられている。



神奈川県北部に位置する愛川町。中津川の清流に恵まれたこの町に知られざる名品がある、それは中津帚。ホウキモロコシという草でつくられる中津帚は、穂先が柔らかいため畳はもちろんフローリングの溝の埃もかき出す。また傷をつけず、音も出ないことから、今注目を集めている。

小林研哉さんは中津帚の魅力に取りつ

小林「幼い頃、祖父の家に遊びに行くと、祖父が帚をつくっていました。その姿に

きっかけは？

かれ、帚づくりの世界に飛び込んだ若き職人。一度は他の職に就いたがその道を捨て、現在は愛川町で修業に励む。

小林研哉氏

憧れ、祖父のように素材で温かみのある帚がつくりたくて職人の道を選びました。中津帚の美しさと細部にまでこだわった技に魅せられてしまい、どうせつくるなら材料からと愛川町に来ました」

小林さんの帚づくりは土づくりから始まる。種をまき、雑草がホウキモロコシの成長を邪魔しないよう手入れを繰り返す。除草剤などは一切使わないため、とても大変な作業だ。しかも一年分の材料をひと夏で確保するので失敗したら翌年帚をつくることのできない。畑仕事は帚を編むより重要で、一番力が入るといふ。収穫は夏、容赦なく襲いかかる日差しのもと、手作業で一本一本丁寧に収穫をする。それを終えたとすぐに天日干し。昔ながらの製法と手業によって柔らかく美しい穂先へと生まれ変わる。

今後の抱負は？

小林「一人でも多くの人に中津帚を使ってもらいたいですね。そのためにも、使いやすさだけでなく、使いたくなる美しい帚を作りたいです」

美しさと優しい掃き心地を追い求め、若き職人は今日も汗を流し、情熱を傾け続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2016年8月取材。掲載内容は取材当時のものです。

映像ドキュメンタリー

「明日への扉」をぜひご覧ください。

WebやTVなどで
お楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

検索



TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)
冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

Discovery CHANNEL

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中